

岡山大学

MONTHLY DIGEST

VOL. 13
2017. 5

TOPICS

1

中性子医療研究センター開所セレモニーを開催



本学は5月9日、本年4月に設置した「中性子医療研究センター」の開所セレモニーを鹿田キャンパスで開催しました。

開所式では、自然生命科学研究支援センター光・放射線情報解析部門鹿田施設の玄関に掲げられた中性子医療研究センターの看板を、榎野博史学長、竹内大二中性子医療研究センター長らが除幕しました。式には、本学関係者のほか、同センターの国際連携部門(寄付研究部門)の寄付者である山崎親男鏡野町長、連携協力を目指している津山中央病院の浮田芳典理事長ら約50人が出席。榎野学長が「新しい医療技術を開発することで皆さんのお役に立ちたい」とあいさつしました。

開所式にあわせて、中性子医療研究センター概要説明会をJunko Fukutake Hallで開催。同センターの松井秀樹教授と市川康明教授が、集まった約100人の参加者にセンターの取り組みを分かりやすく説明しました。

中性子医療研究センターは、岡山発の革新的で全世界に輸出可能ながん治療法を確立し、中性子医療という新規分野の拠点形成を目指します。

参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id6681.html

沈副所長・教授が「平成29年(第11回)みどりの学術賞」受賞

TOPICS

2

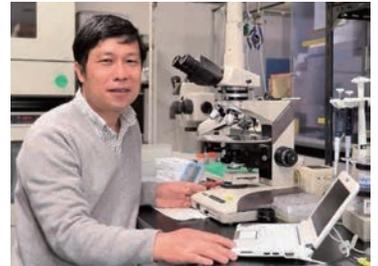
本学異分野基礎科学研究所(RIIS)の沈建仁副所長・教授が4月28日、「平成29年(第11回)みどりの学術賞」(主催:内閣府)の授与式である「みどりの式典」に出席しました。

同賞は、国内において植物、森林、緑地、造園、自然保護等に係る研究、技術の開発、その他の「みどり」に関する学術上の顕著な功績のあった個人に対して内閣総理大臣が授与し、その功績を讃えることにより、「みどり」の大切さについて広く国民の理解を深めることを目的としています。

式典は天皇后両陛下の御臨席のもと、憲政記念館(東京都千代田区)で開催されました。今回、沈教授は、「光合成の酸素発生機構の原子レベルでの解明」に関する功績が認められ受賞が決定し、訪英中の安倍晋三内閣総理大臣に代わり菅義偉内閣官房長官より賞状が授与されました。

沈教授はこれまでに光合成の酸素発生機構を原子レベルで解くことにより、光合成研究を新たな地平へと導いてきました。2011年には、水分解・酸素発生反応を引き起こす「光化学系II」タンパク質の構造を、世界最高の解像度で明らかにすることに成功しました。この成果はアメリカの国際科学雑誌Scienceの『2011年に得られた科学10大成果』の一つに選ばれるなど、国際的にも高く評価されています。

式典の後のレセプションでは、天皇后両陛下が沈教授とお言葉を交わされ、沈教授は受賞の喜びとともに「研究をより加速させて、社会にみどりの力の一つである光合成の原理を還元し、よりよい社会の構築に貢献していきたい」と抱負を述べました。

参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id6667.html

最近の大学の取り組み

役員会で「榎野ビジョン」を披露

本学は本年度から、新たな執行部(第14代学長:榎野博史)が始動し、榎野ビジョンである「しなやかに超えていく「実りの学都」へ」をもとに活動を開始しています。

今回、新執行部として初めてとなる平成29年度第1回役員会が4月24日、本学本部棟で開催され、議長を務める榎野学長が理事や、副学長、副理事らを前に「榎野ビジョン」を披露しました。

参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id6666.html
http://www.okayama-u.ac.jp/tp/profile/message_j.html

TOPICS

3

岡山大学病院で 国内最年少の脳死肺移植手術に成功

岡山大学病院は5月11日、広島県内の病院で脳死と判定された6歳未満の男児から提供された両肺を、1歳の女兒に移植する手術に成功しました。脳死による肺移植では、国内最年少です。

移植を受けた女兒は生後まもなく呼吸状態が悪化し、肺の血管が詰まって心機能が低下する肺高血圧症と診断され、薬物療法などの治療を受けながら移植の機会を待っていました。手術は11日に無事終了しました。

執刀した臓器移植医療センターの大藤剛宏教授は、「亡くなられたお子さんの尊い命とご家族の気持ちを、患者さんにつなぐことができほっとしています」と話しています。

肺移植患者のこれまでの最年少は、当院で平成26年9月に生体肺移植を受けた2歳男児でした。参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id6701.html



「第3回大学短歌バトル2017」で 岡山大学短歌会が優勝

TOPICS

4

全国の大学生が日本の伝統文芸競技「歌合(うたあわせ)」の腕をトーナメント形式で競い合う「第3回大学短歌バトル2017」の本戦が3月4日、東京で行われ、結成5年の本学の短歌サークル「岡山大学短歌会」が初優勝しました。

岡山大学短歌会は、文学部当時3年の川上まなみさん、当時4年の森永理恵さんと山田成美さんの3人で挑み、1回戦は國學院・二松學舎大学連合を3-0、準決勝は北海道大学短歌会を2-1で破りました。決勝戦では「日」「流」「陸」の歌題が出され、大阪大学短歌会を3戦全勝で制し初優勝しました。山田さんは準決勝で詠んだ「銭湯のシャワーを浴びる友人の背中に来るべき結婚式」も高く評価され、最優秀方人に選ばれました。参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id6672.html

PRESS
RELEASE 1

驚愕の新種！ その名は「サザエ」 ～ 250年にわたる壮大な伝言ゲーム ～



大学院環境生命科学研究所(農)の福田宏准教授は、欧米の古文献を再調査した結果、日本では食用として広く知られている貝類のサザエが、これまで有効な学名をもたず、事実上の新種として扱われるべきであることを解明し、サザエの学名を新たに「*Turbo sazae* Fukuda, 2017」と命名しました。本研究成果は5月16日、日豪共同刊行の軟体動物学雑誌「*Molluscan Research*」電子版に公表されました。

サザエは、日本ではアサリやシジミと並んで最もよく知られた貝類であり、国民的アニメーションの主人公の名前にもなっています。しかしそのような種ですら、我々人類はアイデンティティを正しく把握できていなかったのです。このことは、生物の種の正確な識別と同定がいかに困難であることを示す一端として示唆的です。参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/release/release_id468.html

PRESS
RELEASE 2

味を感知する受容体の センサー領域の立体構造を初めて解明

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科(薬)のニパワン・ヌアムケット特任助教(研究当時)、安井典久助教、山下敦子教授らと、理化学研究所、農業・食品産業技術総合研究機構(農研機構)、自然科学研究機構分子科学研究所、東北大学、大阪大学の共同研究グループは、口の中で味物質の感知を担う味覚受容体タンパク質について、受容体の主要部分である細胞外のセンサー領域が、味物質を結合している状態の構造を解明することに成功しました。五感を担うセンサータンパク質のうち、味覚の受容体の立体構造が明らかになったのは、これが初めてです。本研究成果は5月23日、英国の科学雑誌「*Nature Communications*」に掲載されました。

参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/release/release_id469.html

